

鶴見区No.104遺跡（風早台貝塚）発掘調査報告

－都市計画道路岸谷生麦線街路整備事業に伴う埋蔵文化財本発掘調査報告書－

2005

横 浜 市 道 路 局

財団法人 横浜市ふるさと歴史財団

1. 本書は、横浜市道路局による、都市計画道路岸谷生
 麦線埋蔵文化財本発掘調査委託および都市計画道路岸
 谷生麦線埋蔵文化財整理報告業務委託の発掘調査報告
 書である。発掘調査は平成17年2月14日より2月22日
 まで行い、遺物整理・報告書作成作業は、平成17年7
 月11日より11月30日にかけて行なった。

2. 本遺跡（鶴見区No.104遺跡、横浜市文化財地図 鶴
 見区No.104、神奈川県遺跡台帳 鶴見区No.107）は、
 横浜市鶴見区岸谷二丁目1番（北緯35° 29′ 36″ 東
 経139° 39′ 38″）に所在する。

3. 調査組織
 財団法人 横浜市ふるさと歴史財団
 理事長……………高村直助（平成16年度 平野邦雄）
 埋蔵文化財センター
 所長……………坂上克弘（平成16年度 遠藤滋久）
 調査第二係長……………鈴木重信
 調査研究員……………橋本昌幸・鹿島保宏
 作業従事者……………荒井サチ子・石船康晴・栗原江美子・
 武田芳雅

4. 本書の挿図の指示は下記の通りである。
 ◎縮尺は適宜図中に示した。
 ◎方位は全て真北を示す。
 ◎挿図中、特徴のある部分についてはトーンで示した。

5. 遺物整理および報告書作成作業は、橋本が中心と
 なって行なった。

6. 今回の調査で出土した遺物および記録図面等は、財
 団法人 横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財セン
 ターに保管されている。

7. 発掘調査及び出土品の整理作業に際しては、次の諸
 氏・諸機関にご協力を賜った。ここにご芳名を記し深
 謝の意を表する（敬称略 五十音順）。
 岡本孝之 首都高速公団神奈川建設局 馬場学 みら
 い・地崎（負）岸谷生麦線（生麦方面行き）トンネル
 特定建設工事共同企業体 横浜市教育委員会 横浜市
 道路局

1 遺跡の位置と環境…………… 1

2 調査経過…………… 3

3 調査の所見…………… 4

 (1) 層序…………… 4

 (2) 検出された遺物…………… 5

4 まとめ…………… 6

付 編…………… 9

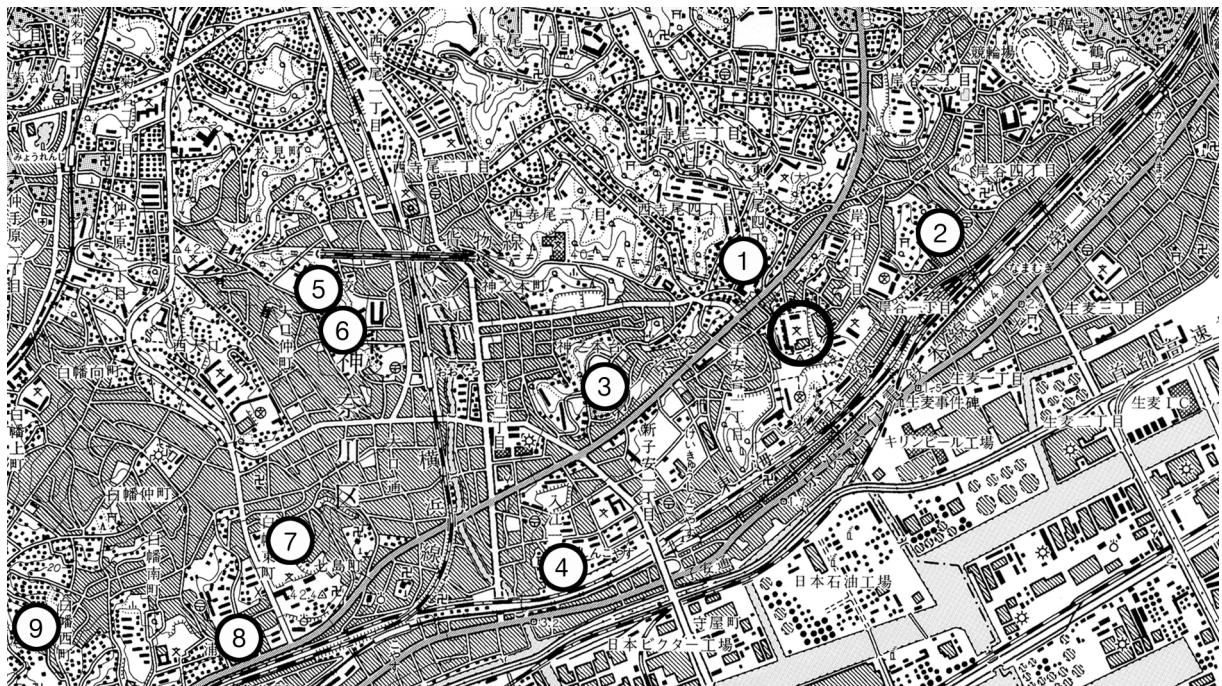
1 遺跡の位置と環境

鶴見区No.104遺跡（風早台貝塚）は、JR京浜東北線新子安駅から北東約0.8km・京急生麦駅から西南西約0.7kmの、鶴見・神奈川区境に位置する横浜市立生麦中学校をのせる台地を中心に所在する。

横浜市東部域にあたるこの付近の地形は下末吉台地と呼ばれ、頂部に平坦面を有する標高40～50mのなだらかな台地が広がり、北部の急峻な多摩丘陵とは対照的である。東京湾に面した臨海部では、標高40mほどの台地が海岸近くまで迫り、また台地には樹枝状に小谷戸が刻まれ、沖積面が深く形成されている。本遺跡をのせる子安台の丘は、鶴見川と入江川に挟まれた東京湾を臨む台地南端付近に、舌状に張り出した丘のひとつである。東西には支谷が入り込み、かつて寺尾方面へと続いていた尾根は、国道1号線により分断されている。子安台公園の中に設置されている三角点は標高39.2mを示し、南側の眼下に開ける海岸は今でこそ沖合まで埋め立て地が延びているが、明治後期までは旧東海道に沿って遠浅の穏や

かな海岸が広がっていた。

本遺跡の周囲には、低位沖積地と接する台地縁辺を中心に多くの遺跡がみられる。入江川の左岸、本遺跡の北約0.4kmに位置する蕃神台貝塚^{ぼんしんだい}は、貝層中より縄文時代後期、周囲の包含層より中期の遺物が出土している。当初、風早台貝塚と混同されていたが、尾根続きの台地上にある。北東約0.6kmの安養寺境内貝塚では縄文時代後期の土器が出土している。西約0.7kmには神之木台遺跡および富士見塚古墳がある。神之木台遺跡は弥生時代後期の集落址であるが、一方台地斜面では縄文時代早期の遺物包蔵地となっている。富士見塚古墳は円墳で、同出土とされる土師器が東京国立博物館に収蔵されている。南西約1.1kmの溝ノ下遺跡は縄文時代早・前期を中心とした遺物包蔵地として知られる。また右岸には、西約1.6kmの大口台遺跡・大口坂貝塚がある。大口台遺跡は、縄文時代中期・弥生時代中期の集落址で、加曽利E式期には貝塚の形成が認められた。縄文時代早期の大口坂貝塚は、大口台遺跡と同一台地上に位置する。入江川・滝



- | | | | | |
|---------|-----------|-----------------|----------|---------|
| 1 蕃神台貝塚 | 2 安養寺境内貝塚 | 3 神之木台遺跡・富士見塚古墳 | 4 溝ノ下遺跡 | |
| 5 大口台遺跡 | 6 大口坂貝塚 | 7 白幡浦島丘遺跡 | 8 浦島ヶ丘遺跡 | 9 白幡西貝塚 |

第1図 遺跡の位置と環境（1/25,000）

の川の間にあたる西南西約1.8kmの白幡浦島丘遺跡、同約2.1kmの浦島ヶ丘遺跡、同約2.7kmの白幡西貝塚なども知られている。白幡浦島丘遺跡は縄文時代前期・古墳時代・近世の各時期で貝層の検出がみられた。浦島ヶ丘遺跡は弥生後期の遺跡で、白幡西貝塚は縄文時代早期末の小貝塚である。

横浜市鶴見区から神奈川区の沿岸地域には、古くから貝塚が多く存在することが知られている。風早台貝塚はこれらの貝塚のうちの一つで、大正末期に続けて発掘が行われている（甲野 1924、移川・橋本 1925）。甲野勇らが報文中で「バンシン台貝塚」と呼称しているこの調査では、確認されたA～Dの4地点の貝層のうちA・D地点の発掘を行ない、A地点で約15㎡を発掘し厚さ約40cmの貝層を、D地点では2㎡ほどの狭小な範囲を発掘し、厚さ40～54cmほどの貝層が堆積しているのを確認した。また翌年に移川子之蔵・橋本増吉らは名称を「子安池谷貝塚」とした上で、甲野らの発掘を踏まえ、新た

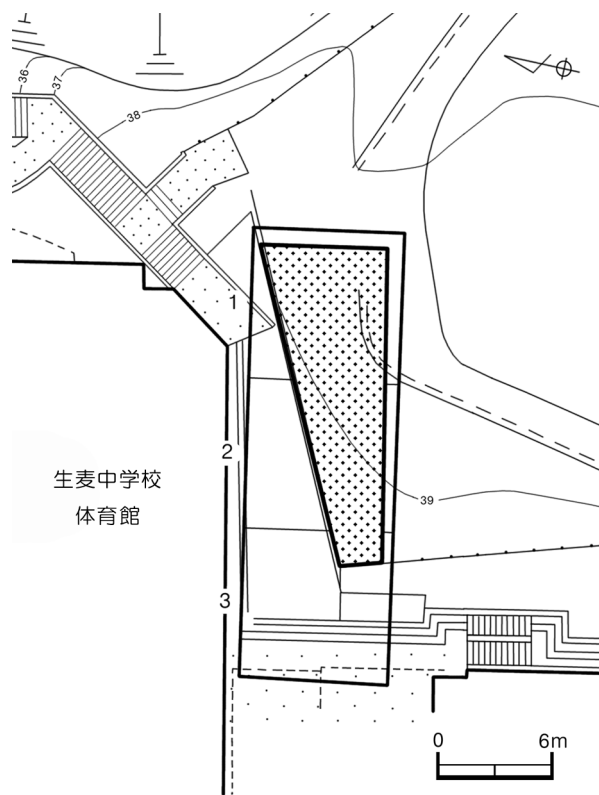


写真1 遺跡遠景（東より）



写真2 調査区近景（着手前）

にE・F地点を調査した。E地点では「純貝層が約三尺餘の厚さをなしている」ことを確認し、さらに伸展葬の人骨1体を検出した。今回の調査区域に比定されるF地点は僅か約3㎡四方の発掘であったが、確認された貝層は「厚さは約三尺」とかなり厚く、また出土遺物も多かったようである。その後、発掘調査は途切れるが、石野瑛は周囲の二見台貝塚・東寺尾貝塚・生麦岸貝塚とともに「子安町ツクリ松貝塚」および風早台貝塚を（石野 1927）、酒詰伸男（土岐伸雄）らは蕃神台貝塚・生麦岸貝塚・「池谷貝塚」・風早台貝塚を紹介している（土岐・竹下 1934）。ただし、石野はのちに地名表の中で、「ツクリ松貝塚」を風早台の異称としながらも別項で打越貝塚（子安町打越つくり松）を挙げており、酒詰も「池谷貝塚」を風早台貝塚の異称としているように、当時は近辺の貝塚の名称と位置についてかなり錯綜していたようで（石野 1953、酒詰 1959）、岡本孝之氏がこれらの検証を行なっている（岡本 2001）。昭和48年には生麦中学校の校庭整備に伴い貝塚の発掘調査が行われ、縄文時代早～後期の土器が出土しているが詳細については不明



第2図 調査区配置図（1/400）

である（横浜市教育委員会 1983）。

「今は生麦中学校の校庭となっている風早台 戦前までは一帯の畑地で……」と記されているように（稲葉・池谷 1969）、子安台の丘は戦前には耕地として利用されていたが、空襲時の非難や延焼阻止などのための防空緑地として、保土ヶ谷区常磐公園や港北区綱島公園などが開設され、昭和20年3月には三ツ池緑地とともに子安台緑地が完成した。防空緑地は高射砲陣地や農地としても活用され、高射砲陣地として使用されていた子安台は、終戦後進駐軍により接収され、米陸軍の高射砲陣地として引き続き利用されていた。22年に接収地の北側に横浜市立生麦中学校が開校したが、25年12月には校庭の過半を米軍に接収された。30年12月に接収が解除され約27,000㎡が返還されたが、民有地および生麦中学校用地を除く約21,000㎡が陸上自衛隊子安分屯地として44年まで貸与された。そして50年3月によりやく公園として整備され、市民に公開された。

2 調査経過

現地作業は、平成17年2月14日に測量作業から着手した。まず調査区域を設定し、レベル原点を既存の三角点より移設した。翌15日に掘削作業を開始し、重機及び人力による表土層の掘削除去作業を行なった。周囲の樹木の保護や、調査エリア以外への進入を極力控えたため、重機の稼働できる範囲に限られ、調査区西側から東側へと退路を確保しながら掘削に着手した。表土掘削の結果、深さ約60cmでローム層が検出された。その上位に



写真3 表土除去作業

は、ローム漸移層とともに縄文時代の遺物包含層相当である暗褐色土層の一部が堆積していたものの、調査区中央付近より北東部では、すでにローム層中まで深く削平されており、暗褐色土層の上位および削平された跡には、ガラス片や金属片および僅少の貝殻片が混入した土層が認められ、近年に埋め戻し・整地がなされていたことが判明した。とくに調査区東側では崖状に大きく削平され、攪乱の深さは現地表面より約2.5mまで達し、作業は予想以上に時間がかかり、表土掘削作業および攪乱部分の掘削は18日まで続いた。続いてローム面で確認された近年の攪乱および木根痕を人力にて掘削し、同時に攪乱土中に散見された土器小片や貝殻の収集を行なった。21日にはローム面での記録作業を実施し、合わせてローム層の試掘に着手した。ローム層の比較的安定した地点に1×1mの試掘溝を2か所設定し、調査を行なった。なお東側の深い攪乱穴については、安全管理の点から、写真撮影・測図などの記録作業を先行して実施し、直ち



写真4 遺跡見学会（2/19）



写真5 遺跡見学会（2/21）

に埋め戻した。土層断面図の作成や写真撮影等の記録作業を22日に行い、調査を終了した。

調査の結果、今回の調査範囲からは、想定された縄文時代前期の貝塚も含め、遺構と考えられるものは全く検出されなかった。また攪乱土中に混在していた遺物を除き、暗褐色土層およびローム層中からの出土遺物は皆無であった。

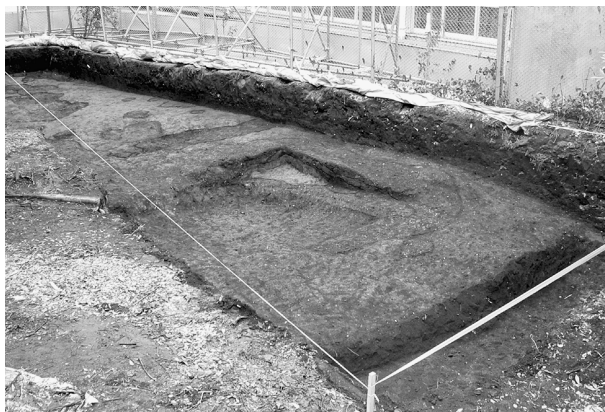


写真6 表土除去終了



写真7 先土器時代調査風景

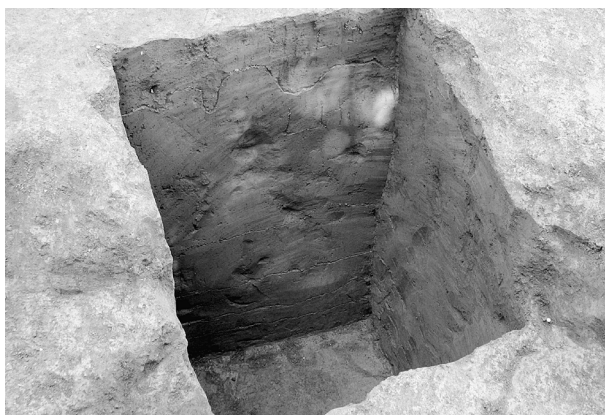
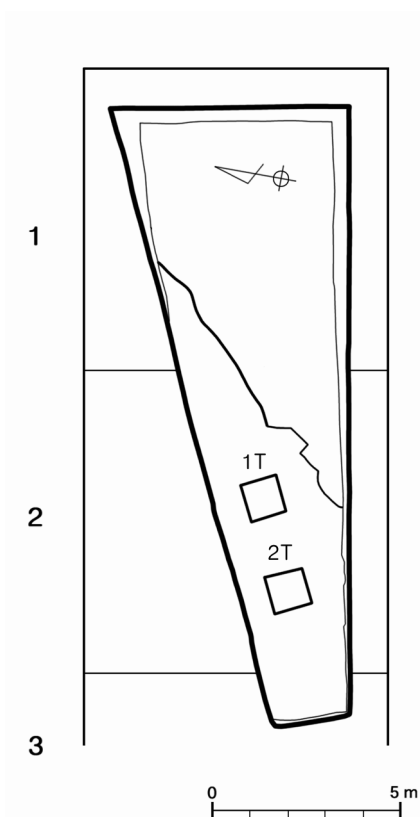


写真8 先土器時代調査区No.1



第3図 先土器時代調査区図 (1/200)



写真9 先土器時代調査区No.2

調査期間中に3回の見学会を開催した。18日に岸谷小学校6年生(教職員2名・生徒52名・ほか1名)、19日に一般市民(37名)、21日には生麦中学校有志(教職員2名・生徒20名・ほか3名)をそれぞれ対象とした。

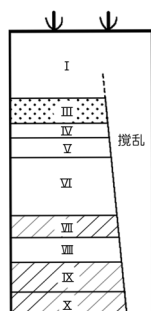
3 調査の所見

(1) 層序

今回の調査で確認された土層堆積状況は以下のとおり

である。

I層：表土層 盛り土・攪乱土層など、現代の再堆積土。黒色土・褐色土およびローム土が互層に積まれる。牛乳瓶などのガラス片やドラム缶などの金属片のほか、若干の粉碎された貝殻片や土器小片もみられる。



第4図 土層模式図

III層：暗褐色土 細粒で粘性が強く、硬質。若干のスコリアを含む。縄文時代遺物の包含層相当層。調査区南西部で層厚約20~30cm確認された。本層の上位部分は既に失われている。

IV層：ローム漸移層

V層：ソフトローム層 (L1S層)

VI層：第一ハードローム層 (L1H層)

VII層：第一黒色帯 (B1層)

VIII層：第二ハードローム層 (L2H層)

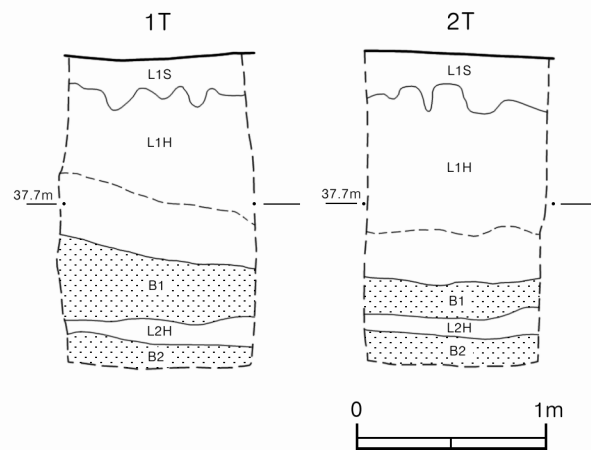
IX層：第二黒色帯上位層 (B2U層)

X層：第二黒色帯下位層 (B2L層)

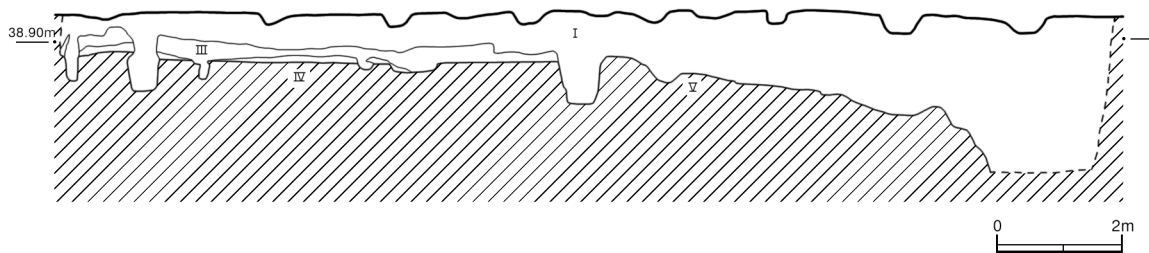
(2) 検出された遺物

調査区域の周囲では、過去に数か所の貝層が確認され、また調査着手前には地表面に貝殻の散布がみられ、貝塚が存在することが想定された。しかし、今回の調査では遺構と考えられる痕跡は皆無で、現代の畑に伴うと考えられる溝2条や木痕による攪乱がみられたのみであった。

出土遺物は、縄文時代早期から前期の土器片約80点、弥生時代後期の土器片数点のほか、土製円板1点、土錘1点、貝殻片が若干みられた。しかしいずれの遺物も攪乱土中よりみつかっており、安定した土層から出土したものは皆無であった。したがって、今回の調査地点において、貝塚やそのほかの遺構が存在していたことを裏付けるものではない。出土遺物の主体は縄文時代前期のもので、ほかに弥生時代後期の甕が数点みられる。1001から1021は深鉢で、1001はLの撚糸文を施す。1002は口縁部片でRL縄文と結節文を施す。胎土に繊維を含む。1003はLの無節縄文を施す。1004から1013はRLの、1014はLRの縄文を施す。概ね色調は暗褐色を呈し、1005は胎土に繊維を若干含む。1015はRLの縄文を地文にし、平行沈線を施す。1016から1019は平行沈線を施す。1020はRLの縄文と結節沈線を施す。1021はRLの縄文を地文にし、円形刺突文を施す。1022から1025は甕で、1022は口縁部に刻みを付す。外面はナデ、内面には



第5図 先土器時代土層断面図 (1/40)



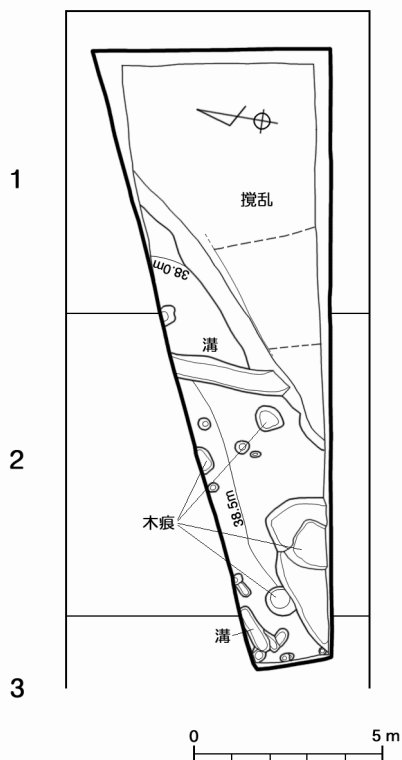
第6図 調査区北壁土層断面図 (1/120)

ミガキを施す。1023は内面口縁および外面にハケ目、内面胴部にはミガキを施す。1024・1025は外面にハケ目、内面にはミガキを施す。1026は台付甕の脚部で、内外面ともミガキを施す。2001は土製円板でR Lの縄文を施す。径2.9cm。2002は土錘で長さ2.2cm・径0.9cm・重量1.6gをはかる。

発見された貝は、ハマグリ・アサリ・シオフキ・オキシジミ・カガミガイ・ハイガイ・サルボウ・マテガイ・マガキ・アカニシ・バイガイ・キサゴ・ウミニナなど、整理箱1箱分である。とくにハマグリ・カガミガイ・キサゴが多く、マテガイは僅かである。

4 まとめ

今回の調査では、貝塚や住居址・柱穴などの遺構に伴う掘り込みの痕跡と考えられるものは、全く確認されなかった。調査を実施した区域内では、暗褐色土層下部からローム層中にまで達する削平がなされていた。このことから、過去の調査で検出された縄文時代前期の貝塚を包含する土層は、すでに失われているものと考えられる。



第7図 縄文時代調査区図 (1/200)

妥当であろう。攪乱土中に貝殻片が混入していたが、数量的には僅かなもので、ここに本来存在していたものか、他所から埋め戻し土と一緒に運ばれてきたものかは詳らかでない。調査区南東部で検出された崖状の削平は、調査区外の南北に直線的に伸びており、このラインの東側では同様に大きく削平されている可能性が高いと考えられる。またこの部分の埋め戻し土からは、著しく腐食し



写真10 調査終了全景

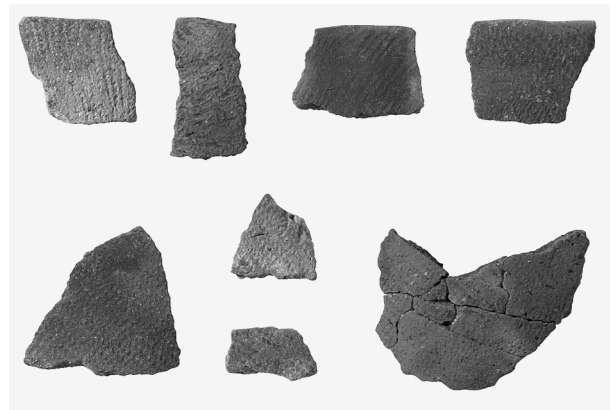


写真11 出土遺物 1001~1008

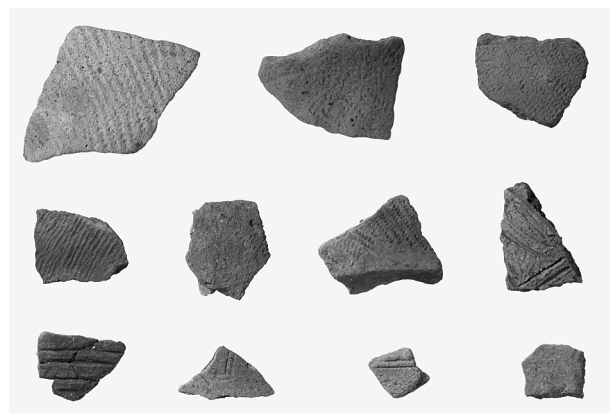
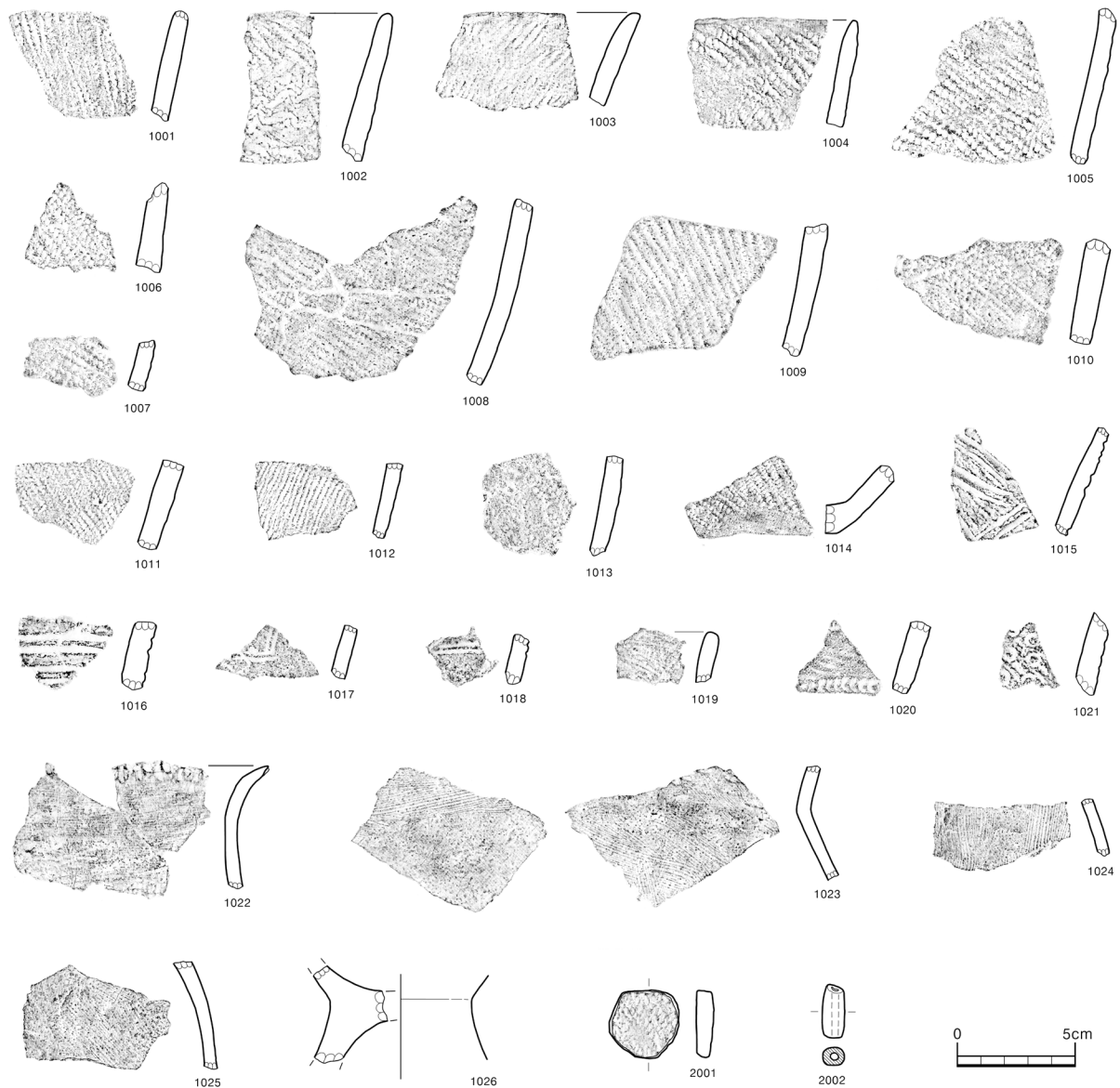


写真12 出土遺物 1009~1019



第8図 出土遺物（1/3）

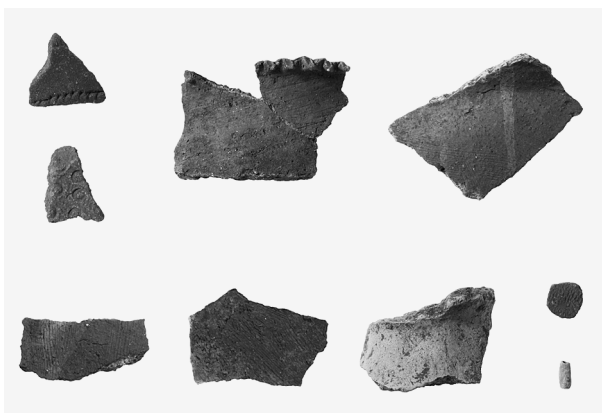


写真13 出土遺物 1020～1026・2001～2002

たドラム缶も何点か出土しており、米軍あるいは自衛隊の管理下にあった時期に埋められたものと考えられる。

大正年間にいくつかの地点で調査された風早台貝塚の周辺は、昭和に入り高射砲陣地を経て米軍に接収され、接収解除ののち陸上自衛隊子安分屯地として利用されてきた。また台地頂部付近には、昭和22年に開校した市立生麦中学校の校舎が建設され、台地周辺は高度成長期に入り宅地化が進んだ。現代のこうした土地利用の変遷の中で当地の形状も大きく変わり、これに伴い遺跡の一部も失われていった可能性は高い。

【参考文献】

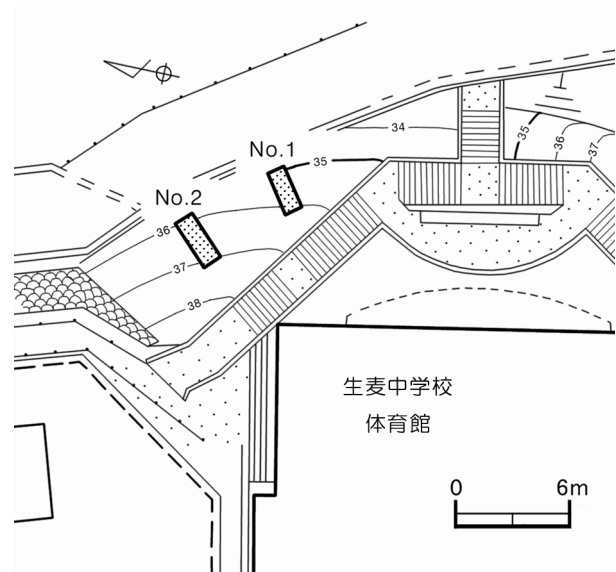
- 移川子之蔵・橋本増吉 1925 「子安池谷貝塚発掘及び人骨出土状態概報」『史学』4 - 4
- 石野瑛 1927 『横浜近郊文化史』
- 石野瑛 1953 『神奈川県大観』2
- 稲葉森三・池谷健二 1969 『駒岡及びその周辺の上代遺跡』
- 岡本孝之 2001 「横浜考古学事始」『考古学論叢神奈川』9
- 神奈川県 1977 『神奈川県史』資料12
- 神奈川県 1979 『神奈川県史』資料20
- 神奈川区誌編さん刊行実行委員会 1977 『神奈川区誌』
- 甲野勇 1924 「武蔵国橋樹郡生見尾村貝塚発掘報告」『人類学雑誌』39 - 4・5・6
- 財団法人 かながわ考古学財団 2003 『白幡浦島丘遺跡』
- 酒詰仲男 1959 『日本貝塚地名表』
- 鶴見区史編集委員会 1982 『鶴見区史』
- 土岐仲雄・竹下次作 1934 「神奈川県鶴見附近の諸貝塚」『史前学雑誌』6 - 5
- 日本大学考古学研究会 1960 「神奈川県白幡西貝塚調査報告（1）」『日本大学史学会研究彙報』4
- 日本大学考古学研究会 1962 「神奈川県白幡西貝塚調査報告（2）」『日本大学考古学通信』5
- 日本大学考古学研究会 1963 「神奈川県白幡西貝塚調査報告（3）」『日本大学考古学通信』6
- 横浜市 1999 『横浜市史Ⅱ』2上
- 横浜市教育委員会 1984 『昭和58年度 横浜市文化財年報』
- 横浜市教育委員会 2003 『平成13年度 横浜市文化財年報』
- 横浜市教育委員会 2003 『横浜市文化財地図』
- 横浜市埋蔵文化財センター 1992 『大口台遺跡』
- 横浜市立生麦中学校 1997 『創立50周年記念誌なまむぎ』

付 編

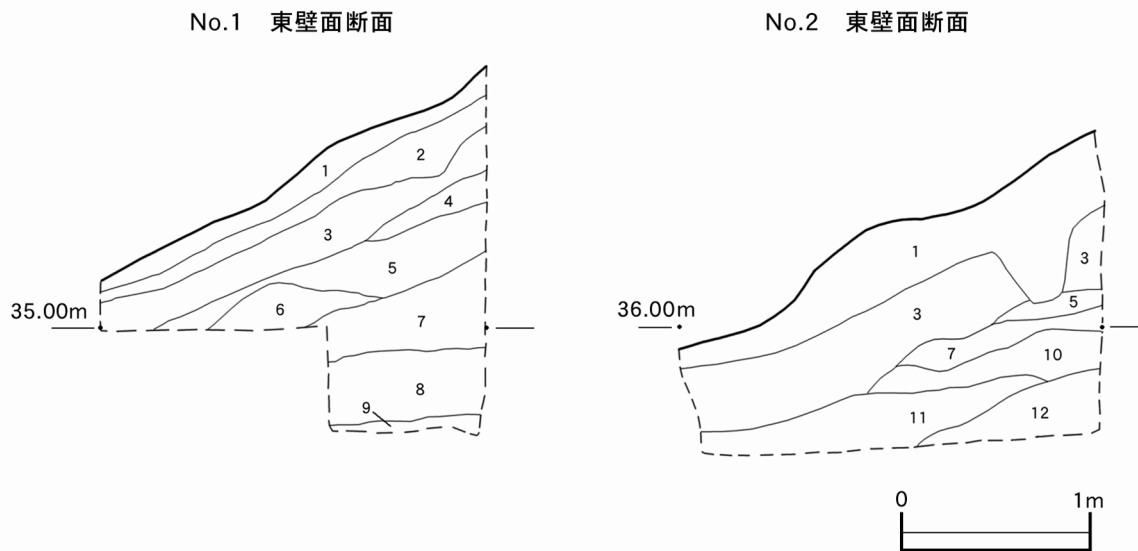
今回、市立生麦中学校及び子安台公園部分のアンダーピニング工事に伴う生麦中学校体育館東側斜面部の既存樹木の移植が計画され、当該地が、周知の埋蔵文化財包蔵地（鶴見区No.108）内に所在するため、平成17年7月6・7日の2日間にわたり教育委員会文化財課による現地立会調査を行った。

工事計画地の地表面には、僅かながら破砕貝の散布が認められたため、一部、試掘溝を設定し掘削による遺構・遺物等の存否確認を行うこととし、調査にあたっては、財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センターの協力をえて、実施した。

確認の対象地は、市立生麦中学校体育館と市道との間にある、2～5×15mほどの台形の斜面地で、幅1m・



第9図 立会試掘溝位置図（1/400）



- 1 現表土
- 2 暗褐色土：粗粒で脆弱。粘性ややあり。ロームブロック・ローム粒をやや多含する。破砕貝を極く僅かに含む。色調は褐色味強い。
- 3 暗褐色土：粗粒で脆弱。粘性ややあり。ロームブロックを若干含む。2層より貝は僅かに多い。色調は黒味を有する。
- 4 明褐色土：ロームブロック・ローム粒主体土。貝の混入はみられない。
- 5 暗褐色土：粗粒で脆弱。粘性弱い。ローム粒を含むが混入物少ない。
- 6 黄褐色土：ロームブロック（3～5cm）主体土。
- 7 明褐色土：粗粒で脆弱。粘性弱い。ローム粒・ロームブロック（0.5～1cm）やや多含する。
- 8 暗褐色土：粗粒で極めて脆弱。粘性弱い。ガラ等を多く混入する層で破砕貝を僅かに含む。
- 9 暗褐色土：砂質で粗粒。粘性弱く、脆弱。混入物なく、色調は黒味が強い。
- 10 暗褐色土：粗粒で脆弱。粘性弱い。ロームブロック（2～10cm）をやや多含する。破砕貝を若干混入する。
- 11 暗褐色土：粗粒で脆弱。粘性弱い。10層に比べロームブロック少なく、貝はやや多い。色調は黒味が強い。
- 12 黄褐色土：ロームブロック主体土。

※土層は全て再堆積土（埋め戻し土）

第10図 土層断面図（1/40）



写真14 掘削前全景

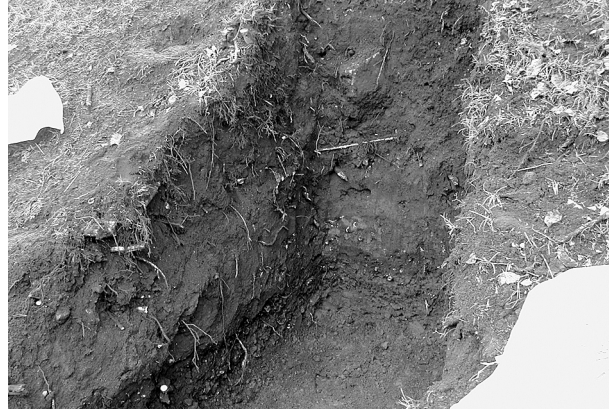


写真16 2 T土層断面

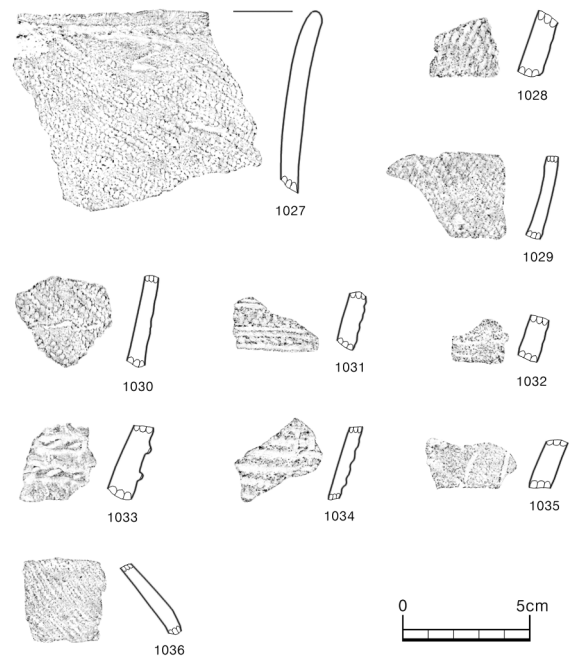


写真15 1 T土層断面

長さ2 m余りの試掘溝を2か所設定した。図中で1 Tとした試掘溝では、斜面上位で約2 m、また2 Tでは約1.7 mの深さまで掘削したが、自然堆積土は認められず、全て埋め戻しなどの人為的な再堆積土であった。このため、遺構と考えられる落ち込みは検出されず、これらの再堆積土中から、若干の貝殻と少量の土器片を採集したにとどまった。

出土遺物は、土器片約20点および若干の貝がみられた。土器片は縄文時代前期の土器が主体となっており、弥生時代後期の壺の破片が1点みついている。これらの遺物はすべて表土層および攪乱層から出土している。

1027は深鉢の口縁部片で、R Lの縄文を施す。1028から1035は深鉢の胴部片で、1028はL Rの、1029はR Lの縄文を施す。1030はR Lの縄文及び結節文を施す。1031・1034はL Rの縄文を地文とし、沈線を施す。1032は平行沈線を施す。1033はR Lの縄文を地文とし、刻みを付した隆帯を施す。1035は沈線を施す。1036は壺の胴



第11図 出土遺物 (1/3)

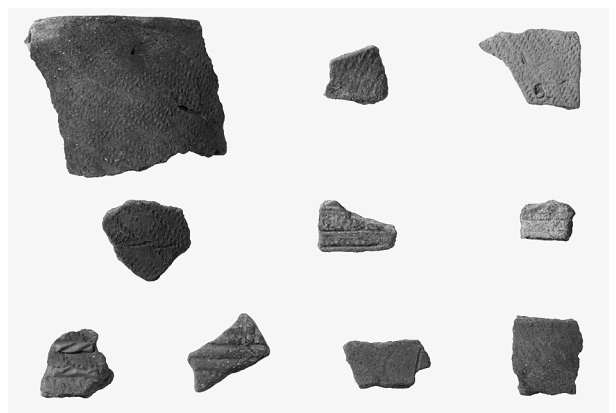


写真17 出土遺物 1027～1036

部片で、R Lの縄文を施す。1030・1032・1035・1036は
1 Tより、1027は2 Tより出土している。

貝は、ハマグリ・アサリ・シオフキ・オキシジミ・カ
ガミガイ・ハイガイ・アカニシ・バイガイ・キサゴなど
が少量採集できた。その組成はNo.104遺跡の発掘調査
で採集された種類とほぼ同一であった。

抄 録

ふりがな 書名	つるみくなんばーひやくよんいせき (かざはやだいかいづか) ほんはつちつちようさほうこく 鶴見区No.104遺跡 (風早台貝塚) 本発掘調査報告		
副書名	都市計画道路岸谷生麦線街路整備事業に伴う埋蔵文化財本発掘調査報告書		
編著者名	橋本昌幸・鹿島保宏		
編集機関	(財)横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター		
所在地	〒224-0034 神奈川県横浜市都筑区勝田町760 TEL (045) 593-2406		
発行年月日	西暦2005年11月30日		
ふりがな 所収遺跡名	つるみくなんばーひやくよんいせき 鶴見区No.104遺跡 (かざはやだいかいづか) (風早台貝塚)	ふりがな 所在地	かながわけんよこはましつるみくしや 神奈川県横浜市鶴見区岸谷 にちょうめいちばん 二丁目1番
市町村コード	141011	遺跡番号	鶴見区No.104 (県) 鶴見区No.108 (市)
北緯	35° 29' 36"	東経	139° 39' 38"
調査期間	西暦2005年2月14日～2月22日		
調査面積	70㎡		
調査原因	街路整備		
所収遺跡名	鶴見区No.104遺跡 (風早台貝塚)		
種別	貝塚		
主な時代	縄文時代		
主な遺構	なし		
主な遺物	縄文土器・弥生土器		
特記事項			
概要	<p>学史的に著名な貝塚であるが、今回の調査を実施した区域内では、暗褐色土層下部からローム層中にまで達する大規模な削平が認められ、縄文時代の堆積土層からの遺構・遺物の検出は皆無であった。したがって、想定されていた縄文時代前期の貝塚もすでに消失している可能性が高い。なお、若干の貝殻片および土器片が攪乱土中に混入していたが、他所から埋め戻し土と一緒に運ばれてきたものと推察される。調査区南東部で検出された崖状の削平は、調査区外の南北に直線的に延びており、このラインの東側では同様に大きく削平されているものと考えられる。</p>		

鶴見区No.104遺跡（風早台貝塚）発掘調査報告
－都市計画道路岸谷生麦線街路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

編 集 / 財団法人 横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター
〒224-0034 横浜市都筑区勝田町760 TEL045(593)2406
発 行 / 横浜市道路局
発 行 日 / 平成17年11月30日
印 刷 / (株) 神奈川機関紙印刷所

